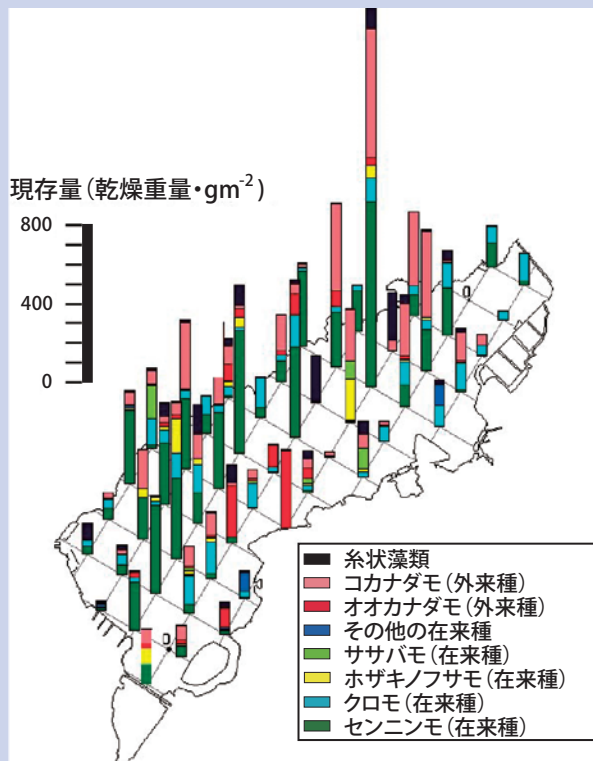


### 1. 沈水植物の繁茂状況

南湖では1990年代半ばから沈水植物が増えてきました。沈水植物の分布範囲は1994年には南湖の面積の11%に過ぎませんでしたが、2014年には96%まで拡大しました。沈水植物の現存量も1995年には約2500tでしたが、2014年には18173tでした。

図T-1は筆者らが2014年9月に52地点で観測した沈水植物の $m^2$ あたりの量を示しています。水深の浅い沿岸部だけでなく、水深の深い沖合いに沈水植物の

量が多い地点がたくさんあり、南湖の全域にわたって沈水植物が繁茂していることがわかります。また、ほとんどの地点で4種類以上の沈水植物が同時に出現しています。これは南湖の沈水植物の生え方の特徴です。現存量が最も多いのは在来種のセンニンモ(40%)でした。2番目は外来種のコカナダモ(27%)、以下、クロモ(在来種、16%)、オオカナダモ(外来種、8%)、ホザキノフサモ(在来種、5%)、ササバモ(2%)、その他(2%)となっています。特定の種類が多いのではなく、在来種も外来種も含めて複数の種類が繁茂していました。



図T-1 2014年9月の南湖における沈水植物の現存量分布

夏から秋にかけては、多くの場所で沈水植物が水面近くまで繁茂します(写真T-1, T-2)。写真T-2は南湖中央部の水深4mの場所に出現した水草の島です。2014年はこのほか沈水植物が多く、写真T-2のような光景が南湖の各所で見られました。写真T-3は水中の群落の様子です。高さ1m前後のセンニンモの密な群落湖底を覆い、その隙間からクロモやホザキノフサモなど背の高い沈水植物がさらに上に伸びています。

### 2. 繁茂による被害と対策

密生した背の高い沈水植物群落は、船の航行や漁業の妨げになります。また、密生した群落の内部で低酸素水塊ができることが報告されており、湖底に住む生き物への影響が心配されています。風などで沈水植物が切れると流れ藻になります。大量に流れ藻が発生すると、港の入口や取水口をふさいだり、エリ(定置網)を押し倒す、湖岸の景観を悪化させる、腐って悪臭を放つなど、さまざまな問題を引き起こし

ます。外来種のコカナダモの場合は、自ら根を切って流れ藻になる性質があるため、コカナダモが多い年は流れ藻の被害も大きくなります。

滋賀県をはじめ関係各団体は、沈水植物繁茂の被害を軽減し、適正な状態まで沈水植物を減らす事を目的に、沈水植物の除去事業をおこなっています(写真T-4)。沈水植物の管理目標は、戦前の南湖の状態を参考に、分布範囲は南湖の面積の半分、現存量は約4000tと設定されています。



写真T-1 際川湖岸(2014年9月 筆者撮影)



写真T-2 下阪本沖1.5km付近にできた沈水植物の島(2014年9月 筆者撮影)



写真T-3 水中の群落の様子(赤野井湾沖、2015年10月筆者撮影)



写真T-4 漂着した沈水植物の除去作業